



## 『失われた時を求めて』のスワンとオデットの結婚をめぐって フーコーの理論を援用しながら結婚の意味を探る

著者	吉川 佳英子
雑誌名	言語文化
号	32
ページ	128-146
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/2833">http://hdl.handle.net/10723/2833</a>

# 『失われた時を求めて』のswanとオデットの結婚をめぐる

—フーコーの理論を援用しながら結婚の意味を探る

吉川 佳英子

はじめに

十九世紀末、パリにはおよそ八万人の娼婦がいて、そのうち四十人程がクルチザンヌまたはココットと呼ばれる高級娼婦であった。彼女達は金のためなら相手を問わない一般の娼婦とは異なり、王侯貴族や大富豪など一流の人士しか相手にしなかった。一九〇〇年前後のベル・エポックにおいてこうしたぜいたくな高級娼婦と関係を持つことは、成長したブルジョワジーにとって社会的身分や経済力を顕示する手段でもあった。

ロール・アドレルの『パリの娼婦たち』<sup>1</sup>によると、一八三〇年から一九三〇年の間は、娼婦の栄光と凋落の期間であったようだ。それ以前はまだ本格的な機能を果たしていなかった娼家は、徐々に快楽の場としての性格を明確にし、一八八〇年代に

栄華を極める。次いで次第に魅力と神秘性を失い、第一次世界大戦前後に少し持ち直すものの、一九三〇年代に至って終焉を迎える。

きらびやかな美女が花と咲いたなかには、ラ・ベル・オテロやエミリエンヌ・ダランソンを始め、リアーヌ・ド・プージイ（一八六九—一九五〇）<sup>2</sup>もいた。貧しい田舎娘だったリアーヌは、持前の美貌を武器に、ルーマニアの貴族との結婚に漕ぎつけるのである。

華麗な生涯を送ったリアーヌは、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』<sup>3</sup>に登場する高級娼婦オデットのモデルの一人となる。小説中のオデットもまた、非の打ち所のない社交人、swanとの結婚をもににする。もつともswanにとつては、かつてのココットとの結婚は社交界における評判を落とす

きっかけにもなったのだが。

ややもすると理解しにくいスワンとオデットの結婚であるが、この結婚は作品中でどのような意味を持つのか、当時の文化や価値観を考慮に入れ、かつブルースト自身の自筆原稿上での描写の変化も辿りながら、多方面から考えてみたい。また、ミシエル・フーコーは独自の「性の言説」をとおして、十九ー二十世紀はじめの社会を理論化していった思想家であるが、スワンとオデットの結婚の意味を考える際には、彼の理論も視野に収めることにしたい。

## 1 ココットと呼ばれる高級娼婦オデット

当時、娼婦には「プロステイテュエ」という金目当ての下級娼婦と、「クルチザンヌ」の二種類があった。後者はもともと良家の出で教育や礼儀作法を身につけ美貌と知性を兼ね備え、国王の愛妾にもなれば自宅に政界の有力者や芸術家などを集めて社交の中心ともなった女性を表していた。ロマン主義作家が一種、憧憬の念をこめて描く娼婦「ロマン主義的クルチザンヌ」は作家のファンタズムが色濃く反映された娼婦像であり、それぞれの作家が作り上げ文学的次元にまで昇華した詩的な娼婦であって、男性作家の女性観を探るには適しているとも言えよう。十八世紀半ばに書かれロマン主義的クルチザンヌの原点ともいうべき『マノン・レスコー』や、『椿姫』、サンドの『イジ

ドラ』には、愛の殉教者でもあり男性優位社会の犠牲者である「恋するクルチザンヌ」がしばしば描かれた。またバルザックは、男の精力を枯らし知性を奪い人格をも破壊し死に至らしめることもある悪魔的で、しかも自分の悪徳を自覚し恥じることもない「危険なクルチザンヌ」を描いた。さらに空想的社会主義の影響下に書かれたシューやユゴーの「社会小説にあらわれるクルチザンヌ」も時代の仇花として興味深い。

さて、『失われた時を求めて』の第一篇「スワン家の方へ」の第二部は「スワンの恋」というタイトルが付いたスワンとオデットの恋物語である。しかし、スワンの恋の物語というよりはむしろ、嫉妬の物語と言えるかも知れない。手練手管に命をかけるココットのオデットであり、女性心理には精通しているはずのスワンでさえ、いつしか手玉に取られてしまう。

ココットを描いた十九世紀の小説の中でもオデットはその人物像が極めてつかみにくい。基本的にオデットはスワンの視点を通して描かれているだけに、その視線はオデットの心の奥底まで届かない。結果として、この女性登場人物は輪郭が定まりにくく、曖昧さを至る所に残していると言える。こういう相違点は見られるものの、ココットを描いた小説の一例えば『浮かれ女盛衰記』のエステル、『感情教育』のロザネット、そして『ナナ』のヒロインーやはり一つの型として、彼女もまたドラマチックな一生を送ることになる。

貧しい家に生まれたオデットは十四歳の時、娼婦になった。

女優をするかたわら、結婚も経験するが、相手の財産を使い果たしては男を転々とする。ブルジョワのヴェルデュラン夫人のサロンでスワンと知り合い、娘ジルベルトをもうけた後しばらくして結婚、サロンの女主人となった。スワンの死後はフォルシユヴィル伯夫人となり、貴族社会に属することに成功する。そして娘を大貴族であるサン・ルー侯爵と結婚させることで自らもゲルマント家の一族となり得たのであった。最後は年老いたゲルマント公爵の愛人として、再び囲われる身分に戻る。

オデットとスワンが結婚したのは、一八八九年とされているが、これはナポレオン三世の帝政が崩壊した後の、世紀末的な退廃とベル・エポックの享楽が同居していた時代で、まさにドゥミ・モンドの全盛期であった。ただ、一八七〇年代以降は高級娼婦の存在は目に見えて少なくなる。上流階級の男達がコッコットに金を巻き上げられるのを恐れるとともに、一八七一年の普仏戦争の敗北が、ある種の風習の変化をもたらした。すなわち、高級娼婦に、より控え目な態度を求めるようになり、またブルジョワ女性の地位を脅かすことのないように求められたのだ<sup>4</sup>。

このような、時代の変化も相俟って、社会の階層を巧みに上っていける高級娼婦の傍らで、惨めに減んでいく女性もまた多かった。そんな中で、バトロンとの結婚にこぎつけることのできた『失われた時を求めて』のオデットは、さながら「成功した高級娼婦<sup>5</sup>」の一人であろう。スワンのような申し分のない

社交界の男をついに結婚する気にさせたのだから。

オデットとスワンのストーリーはもちろんフイクションであるけれども、ブルーストはまったく現実に立脚しない話を作り上げたわけではない。十九世紀の社会を視野におさめ、彼自身が生きた世界を多分に映し出した物語である。同時代の世相の「証言」ともなっている。高級娼婦というややわかりにくい文化の実際、それも彼女たちの結婚の実際をここで少し確認しておこう。

## 2 高級娼婦の結婚事情

いわゆる「裏社交界」の呼び方はデヌマ・フィスの戯曲に起因する。そこに生きる高級娼婦<sup>ドミ・モンド</sup>たちは社交界には出入りできない。ドゥミ・モンデーヌは以下のように説明できる。

「……自分の気にいった男には身を委すが金銭すくでは誰のものにもならない女たち（……）この女たちはみな自宅で個別に、また、アバルトマンを借りている場合でも、各首都合のよい時間帯を決めてそれぞれ客を取る」<sup>6</sup>。

この定義によると、裏社交界の女たちは確かに金のからんだ取引をするが、相手を選択する自由がないというわけではなく、金銭もバトロンからの贈り物と言える。いわゆる選択の余地な

く売春を行う下層階級での売春とは様相を全く異にする。

高級娼婦の恋愛事情が複雑なのは、デユマの『椿姫』を見てもわかるように、娼婦であるマルグリットが青年アルフレッドに、つい恋愛感情を抱いてしまうとといったルールの逸脱に起因する。アルフレッドの父はマルグリットの娼婦という過去が受け入れられなくて息子と別れるよう彼女に迫る。

ところで『椿姫』の主人公、マルグリット・ゴージェイエのモデルとなった高級娼婦、マリー・デュプレシーの生涯を描いた『よみがえる椿姫』という伝記がある。それによると、彼女は、マルグリット同様、美貌で高い教養を持っていたが、病気がちで若くして亡くなる。しかし、マルグリットと異なり、マリーは結婚をする。それも「一人の男を愛するがゆえにもう一人の男と結婚」したということだ。当時、音楽家リストと交際していたマリーだが、高級娼婦との結婚をためらうリストをしり目に、彼女は別の恋人であるペレグー伯爵との結婚を計画した。そうすることで、リストとの関係も継続させる。

『椿姫』の主人公マルグリットのような悲劇の結末もあれば、そのモデルのマリーのようなしたたかな「結婚生活」の例もある。高級娼婦の結婚事情はいずれにせよ、娼婦という過去との折り合いのつけ方を抜きにしては語れない。

さらに結婚そのものを取り巻く諸事情、とりわけ金銭との関わりは、時代の流れに伴い大きく様変わりしてきたと言える。結婚に金銭が大きく関係する事態は、当時の社会のありようと

も深く関わっている。十九世紀の社交界には、由緒正しい家柄の貴族たちと、七月王政によって活気付いたブルジョワたちがあった。ブルジョワの台頭が金銭優位の価値観をもたらした。七月王政後に閉鎖的な社交界にも新勢力のブルジョワたちが一気に参入し始めたのである。もちろん旧勢力である貴族たちは、反発し、彼らの富をうらやみはしても、貴族ならではの、金で買うことの出来ない家柄と名誉を根拠に誇りを持った。ブルジョワたちはというと、貴族たちの家柄や名誉をうらやみ、もっぱら彼らの生き方を模倣する。

『ゴリオ爺さん』の二人の娘たちは、これら二つの勢力の移り変わりを作中で表現する。ゴリオの長女アナスタジーは、貴族の称号に惹かれてレストー伯爵に嫁ぎ、妹のデルフィーヌは、大銀行家ニュシンゲンに嫁いだ。彼女たちは互いの立場をそれぞれうらやみ、嫉妬し合う。

そんななか、結婚こそが貴族とブルジョワジーのカテゴリーを越える可能性となり得る。当時の社交界での結婚は、ほとんど契約のようなもので、結婚契約書作成にあたり、重要なのは持参金等の金銭の問題であった。十九世紀の結婚において、特に持参金の重要さは計り知れない。ゴリオの娘がそれぞれ望みの身分と財産を手に入れられたのは、彼女たちの莫大な持参金のためである。

絶対王政の社会制度では、各階級は閉鎖的でそれぞれの連絡はほとんどなかった。身分によって決まる結婚が通例であった。

しかし、大革命以降は身分間の垣根が低くなり、さらに貴族たちは革命で財産を失い、それまでの生活を保つために称号や名誉を切り売りすることも起こってきた。このように結婚と金の結びつきは次第に強くなり、金銭のための結婚というブルジョワ的発想が生じることになる。

ここまで、高級娼婦オデットの生きる世界を中心に見てきたが、一方のスワンの側、すなわち高級娼婦と結婚した男性の方は、どのように描かれているのだろうか。むしろ社会的に不利な立場に追い遣られるのだが、その凋落ぶりはいかほどだろうか。

### 3 スワンの凋落をめぐって

スワンの結婚は、まず何よりも世間を驚かせ、社交界の格好の噂的になった。

スワンの交際にかんする家の者のこうした意見は、やがて、彼が最下等の階層の女、ほとんど高級娼婦同然の女と結婚したことによって、証明されたように思われた。それに、彼はけっしてこの女を紹介しようと思わず、私たちの家へ来るのもだんだんと間遠になりながら、しかし相変わらずひとりで来つづけていたが、家の者はこの女をもとに、彼がふだんつきあっている私たちの知らない人たちも—そこか

ら彼女を拾ってきたと想像して—どんな連中か見当がつく  
と考えた<sup>8</sup>。

結婚の反響は貴族のみならず、ブルジョワの価値観にも影響する。ゲルマント公爵は、スワンの結婚で公爵夫人がづらい思いをしたことを嘆き、ヴァントウイユ氏は、「およそ筋がよいな結婚」をした男としてスワンのとの出会いを避け<sup>10</sup>、ベルゴットは、スワンを商売女と結婚した男の見本と評した<sup>11</sup>。

この結果、これまでの付き合いにひびが入り、皆、スワンとは交際を続けにくくなった。とはいえ、スワンの優雅さと機知は相変わらず称賛的であり続け、フォープールの噂によると、スワンの祖母はベリー公爵の愛人であって、彼には王家の血が流れているらしいとも言われているから、醜聞の種である結婚にもかかわらず、スワンはゲルマント家を訪れ続ける。

その一方でスワンは、メンデルの信奉者がやるように、あるいは神話のなかに出てくるように、異種交配の一例としてまるで違った人種であるオーストリア皇女とか高級娼婦などを自分と掛け合わせ、こうして王族や身分の低い者との婚約を結ぶことに、退廃した者の快楽とは言われないまでも、おそらくは芸術家としての一種の官能の喜びを覚えたことだろう<sup>12</sup>。

スワンの社交界での地位はもはや改善の余地なく、野心もくじかれる結果となったが、新たに自虐的な喜びを感じるような事態に至ったということだろうか。

もっとも、『失われた時を求めて』の中のスワンの描かれ方は独特で、時とともにかなり残酷な筆致で描かれる傾向にある。スワンは最初は洗練された社交人で相当な趣味人であった。だが晩年にいたって、ドレフュス派となりユダヤ教に回帰する。すると彼は繊細で鷹揚な人物から、しつこくて野暮な人間に変化し、ドレフュスその人に似るまでになる。スワンは作中で例えば次のように描かれる。

ある種のイスラエルびとの内面には、人生の決められた時間、あたかも舞台におけるがごとく登場できるように、舞台袖で控えている、下品な人間と預言者が残っている<sup>13</sup>。

『反ユダヤ・ブルースト』という著作において、アレクサンドロ・ピペルノは次のように主張している。ブルーストは『失われた時を求めて』のなかで、スワン、プロック、ラシエルといったユダヤ人の登場人物を残酷に扱い、彼らの擬態を非難している、と。つまりスワンの小説中での失墜は、なにもオデットとの身分違いの結婚のみ起因するものではない。ユダヤ的要素とのかかわりが濃密になるにつれ、スワンのネガティブな描かれ方は勢いを増す。例えば、土地や人物の名前に対して

特別なこだわりを示すブルーストが、イギリス起源のユダヤ名「スワン」という名前を通してスワンに残酷な懲罰を与えているとピペルノは指摘する。話者にとって「スワン」という名前は最初は音だけで存在するが、その音は次いで母とのキスを妨害する悪夢と結び付けられる。また、オデットは、スワンの死後、フォルシユヴィル公爵と結婚するが、フォルシユヴィルはジルベルトをみずからの子どもとして認知する。そして、ジルベルトはフォルシユヴィルを「パパ」と呼ぶ。スワンと発音するものはいなくなり、ジルベルトは手紙の末尾に「S.Forchville」と署名するようになる。またジルベルトは「スワン」と発音する代わりに「スヴァン」と発音する<sup>14</sup>。イギリス起源の名前をドイツ風に発音したわけだが、この発音の変更には、ユダヤ人の父にたいするジルベルトの羞恥が窺えるとピペルノは分析する。ジルベルトがスワンという名前を裏切るのは、ブルースト自身が母方のヴェイユ・ワットという名前を裏切りたいとの欲望があるからだともいう。

ブルーストがこの名(スワン)にこれほどの屈辱を課したのは、我々が見逃しているひとつの意味が疑い無くある。我々はこのこに、彼によればあらゆる不幸の原因と看做されている彼の本性の一部分を破壊しようとする欲望をみるこゝとができる。その部分とは、彼の母という遠く深い場であり、ユダヤ人という場である。この部分が前もって彼の差



異を決定し、彼を同性愛にしたのである<sup>15</sup>。

スワンが次第に身を落とし、そのみならず、描かれ方の残酷さが増していくのは、オデットとの良からぬ結婚にのみ起因するというわけではなく、むしろスワンが持つている「ユダヤ」の要素が微妙な影を落としていと主張する。興味深い指摘であり、ブルーストの母方のユダヤの系統を考慮するなら、ユダヤでブルジョワのスワンが高級娼婦のオデットと結婚したあかつきの社交界での評判という非常に込み入った事態を理解する必要があるだろう。スワンの結婚後の社交界での地位失墜の原因を「複合的な理由」ととらえることは、これまでの説明をさらに深めるかたちになることから、ピペルノの指摘は大いに意義深いと言える。

さて、その後ジルベルトはサン・ルーと結婚することになるが、話者はその知らせを電車のなかで聞く。娘のジルベルトがゲルマント家の一員になるのは、きっとスワンも幸せに違いないと言う母に対して、話者は、スワンという名前ではなくフォンシユヴィルという名前で結婚する娘をスワンが喜ぶだろうかと憤慨する。ただ、その後、ジルベルトの娘は無名の文学者と結婚するから、今度はゲルマントという名前を下げることになる。ジルベルトの娘の世代の者たちにとっては、ジルベルトの娘の先祖など、もはや想像し難くなっているが、そうなった頃、スワンとオデット・ド・クレシという名前が蘇る。

ピペルノによれば、『失われた時を求めて』は破滅へとむかう世界をニヒリスティックに書きとめたものだという。そして不動の本質や永遠のアイデンティティーなどは、およそ捉えることのできない曖昧さと矛盾のなかにあつて、ただ揺れ動くことだけを唯一の誠実さと心得て揺れ動いているとも指摘する。

#### 4 性の言説

さて、二十世紀のころ活躍した哲学者フーコーは、一連の著作において、西洋社会の人間が自分たちを性的存在として理解するようになる諸段階を追究し、性的な自己概念を個人の道徳的・倫理的な生活に関係づけた。フーコー最後の著作は、未完におわった『性の歴史』である。フーコーは「性」という観点から論じることと、それまで一般的であった「歴史」の説明に對して、刺激的で新たな説明を加えようとする。それは「性」という極めて個人的かつ秘儀的な面をとおして、社会を再度、眺めることであり、実際、その言説をもってしか語り得ない十九世紀―二十世紀の社会の側面を明らかにしてくれる。フーコーの「性の言説」を考慮に入れて、ここではスワンとオデットの結婚の意味を問うてみたいと思う。さて、その前にフーコーの「性の言説」がどのようなものであるか簡単に概観してみよう。彼は「性の歴史」シリーズの第一巻「知への意志」において、性的な人間について考察を展開するが、この思想家のあざ



やかな分析を少しだどってみたい。

西洋近代社会において、性を語るということは大きな特徴である。告白をとおして、性は科学的な言説に組み込まれていく。告白によって明らかになった内容から性的欲望の存在が想定される。これこそが、『知への意志』の中心的主題となる「性的欲望」という概念の起源だ。つまり、あらかじめ実在する性的欲望をめぐる言説が展開されたのではなく、性についての言説の展開こそが性的欲望の概念を出現させた。

フーコーは我々が性を知らうとし、性によって自分自身を語るような、そんな循環的関係の仕組みをセクシュアリテの装置と呼んだ。そして、親族関係の固定と、名と財産の継承のシステムを婚姻の装置と呼んだ<sup>16</sup>。そのうえで、もともと婚姻の装置の働く場であった家族という関係に、セクシュアリテの装置はどのように関わってきたのかを問う。

近代以後、セクシュアリテの装置は、婚姻に依存する形で設定され、家族の関係に関わっていった。そのようななか、セクシュアリテの装置は次第に拡大し、家族という場において婚姻とならんで重複作用するようになった。それゆえ、性的欲望はまず近親相姦的なものとして現われ、その結果、近親相姦へのタブー意識は強く意識されるようになった。

また家庭における婚姻とセクシュアリテの接近は、性倒錯者たちの存在により婚姻制度に混乱が生じる可能性があるから、この事態を回避するために、神経病理学者のシャルコなどは、

セクシュアリテを婚姻から切り離して精神医学の対象とした<sup>17</sup>。そして彼の弟子であったフロイトは、セクシュアリテそのものを家族から独立させ、さらに徹底的に分析したため、却ってセクシュアリテの根底にふたたび親子の関係を再発見することになり、むしろ婚姻とセクシュアリテの装置とを共存させる結果となった。

セクシュアリテの装置確立から言えることは、この装置はブルジョワジーによりブルジョワジー自身に対して適用されたのであって、他者の快楽を制限・抑制するために導入されたのではないということである。またこの装置の導入目的は、性的な禁欲のためではなく、身体と健康に注目することであった。すなわちそれは他の階級を隷属化する企てではなく、一つの階級自体の自己確認であった。

ブルジョワジーがこのようにセクシュアリテの装置を自らに適用しようとした理由は、まず社会階級としての自らの立場を保持することだった。かつて貴族が「血の正統性」によってそれをなしたと同じように、丈夫な身体と健康的欲望をもってブルジョワという階級を確実に他から区別するためにブルジョワに固有の階級意識こそがセクシュアリテの装置を導入する動機になった。従って、プロレタリアートにとってはセクシュアリテはもとより関係ないことがらだったのだ<sup>18</sup>。ブルジョワ階級出身の『失われた時を求めて』のスワンも、フーコーが提言するようなセクシュアリテの装置の影響の下で生きたと説明

し得るだろうか。我々はその可能性を感じつつ、いったんは保留にし、『失われた時を求めて』の下書き原稿を検討することにしよう。

ここで『失われた時を求めて』に再びもどり、スワンのような申し分のない社交界の男をついに結婚する気にさせたオデットの話を、ブルーストはどのように創造したのであるか。その点に光を当て、創作のプロセスを以下で見よう。そのうえで、フーコーの「性の言説」を援用して、この結婚の説明を試みることにしたい。

## 5 スワンとオデットの結婚はどのように創られたのか

さて、決定稿においてスワンとオデットの結婚のいきさつをノルボワの口を借りて語られるのは『花咲く乙女たちのおかげに』の冒頭、「スワン夫人の周りで」においてであるが<sup>19</sup>、この部分は『スワン家の方へ』の最後の部分との連続性が大いに感じられる。それもそのはずで、ブルーストが一九一三年に『スワン家の方へ』のグラッセ社からの刊行を準備していたとき、「スワン夫人の周りで」はその最終章になるはずだったからだ。しかし、加筆で八百ページにまで膨れ上がった一巻本を出版することは不可能であり、仕方なく『スワン家の方へ』の第三部は分割され、ジルベルトの物語の後半は第二篇冒頭に送られることとなった<sup>20</sup>。従って、時間軸を視野におさめて言うなら、ス

ワンとオデットは一八七九年頃知り合い、「スワンの恋」を経て結婚に至るが、その間約十年間のいきさつは第一篇と第二篇とにまたがって語られるというわけである。

スワンの結婚に関する下書き原稿の一つと考えられるカイエ31<sup>21</sup>とカイエ22<sup>22</sup>にここで注目してみよう。いずれも大まかに言って一九〇九年から一九一〇年頃書かれたものである。

決定稿ではスワン夫妻の結婚をめぐるいきさつは「スワン夫人の周りで」の章で、ノルボワ侯爵の見解として述べられるけれども、結婚前のオデットの妊娠やそれを通して彼女が何を考えたか等はいっさい語られない。しかし、下書き原稿にはその記述が見られる。

スワンはオデットと結婚した。「…」

ところが彼に娘が誕生した。彼は娘をこよなく愛した。これまで到達したことのない愛することの幸せを彼は慈しんでいるかのようで、その幸せはまるで娘のなかに具現化されたかのようであった。というのもある時は母親似、またあるときは父親似となる顔の類似においても、娘は人生が結合できなかつた二つの心をしっかり混ぜ合わせ一つにして、新たな存在のうちに融合していた<sup>23</sup>。

このようにカイエ31ではスワンが結婚したこと、そして娘が生まれ、その子を愛するスワンの幸福ぶりなどが記されている。

続くカイエ22には、同じような内容がさらに深められ、また具体的に書かれている。

スワンが浮気をしているふしがあるとオデットは感づいていたが、彼女はそれに思い悩まなかった。というのもスワンが今、彼女に抱いている静かな愛情がこの先もずっと続くことを感じ取っていたし、彼の子を妊娠していることを告げた時には彼が結婚してくれると直感したからだった。彼女の人生はそのために変わることはなかったが、突如浮かんだ思いに抗うことはできなかった<sup>24</sup>。

おそらくこの断章が書かれた頃、作者の頭の中では「スワンの恋」とスワンの「結婚」はもつと連続したものと意識されていたのだろう。引用にあるようにスワンはそれなりにアヴァンチュールも楽しんでいるけれども、彼の子を妊娠しているのだからそのうち結婚してくれるだろうとオデットは考える。ただ、このカイエでは、オデットの考えたことや感じたことは書かれているが、スワンの側の事情はまだ余り書き込まれてはいない。そのようななかで、次第にブルーストはスワンの情熱と結婚を分離しようと考えられるようになり、以下の引用に見られるように恋愛の情熱が弱まるにつれて二人の間に平穏が生じ、それに伴って結婚の可能性も生まれてくる。

もはやスワンに恋をしていると感じなくなったためか、あるいは前ほど嫉妬深くないスワンが彼自身、彼女にいつそう優しくなったためか、オデットはおそらくスワンに対して再び、もつと親切になった。ただ彼女はおそらく以前ほど優しいわけではなく、彼女の優しさには一種の欠落があり、一方、スワンはもはやオデットを愛していないし、彼女「ブルーストはおそらく」と書くべきところを誤って「と書いているのだろう」に会うことや忠実でいることの都合は相変わらずだったから、彼はもう彼女の優しさのなかにある欠落のことで苦しむことはなかった。オデットに会うことや忠実でいることの都合は、彼にとってはいつでも良くなっていたし、それだからと言って彼がオデットに会うときの喜びや彼が彼女に示す優しさが何ら減じられるわけではないので、スワンはそういうた不都合に気づきさえしない<sup>25</sup>。

一方、同じ頃、すなわち一九一〇年の後半に書かれたカイエ20の中には「ノルボワ侯爵との夕食」の下書きとして「モンフォール氏との夕食」が記されている。「ノルボワ侯爵との夕食」は決定稿では「スワン夫人の周りで」の冒頭におかれているが、ここでスワンとオデットの結婚のいきさつが少年である話者に語られる。話者はノルボワ氏に、スワンの娘ジルベルトにも会ったかどうかとたずねてみる。

彼「ノルボワ氏」は私に答えた。「そうそう、確か十五歳ぐらいのジルベルトとかいう娘がいたのですが、その娘でしようか。彼女は確かに可愛い。でも、お母さんほどきれいにはならないでしょうけれど。」そして私がスワン夫人を称賛すると、「そうですね！では、そのことを彼女に伝えましょう。たいそう喜びますよ。」と彼は付け加えた<sup>27</sup>。

引用ではノルボワ氏はジルベルトを十五才ぐらいと言うが、決定稿では十四―十五才と言う。ウィリー・アシエによる『失われた時を求めて』の年代記の構成の研究<sup>28</sup>によると、スワンがオデットと知り合うのが一八七九年、話者やジルベルトの誕生日が一八八〇年、スワンとオデットの結婚が一八八九年なのであるから、この話者家族とノルボワとの夕食会は一八九四年か一八九五年のことになるだろうか。ただ、『失われた時を求めて』におけるクロノロジーの整合性はしばしば矛盾をきたしていると言わざるを得ない。ここでは回想された時間、回想している時間、そして書いている時間が複雑に絡み合っているのだから。とはいえウィリー・アシエの年代記を目安にするなら、スワンとオデットが結婚した折り、娘のジルベルトは九才であったということになるだろう。九才の娘を伴うオデットとスワンの結婚は、手書き原稿の次の段階であるタイプ原稿のなかでさらに手を加えられる。

さて、一九一一年頃から、ブルーストは既に相当な長さで達していた手書きの原稿をミス・ヘイワードにタイプで打たせ始める。このタイプ原稿にはブルーストがさんざん手を入れたうえで出版社に渡され、そこで印刷の基になるのだが<sup>29</sup>、そのタイプ原稿の中で、それまでの手書きの下書き原稿の内容とかなり異なる「スワンとオデットの結婚のいきさつ」が語られる。ブルーストは最初のタイプ原稿が原型をとどめなくらいに加筆や訂正を加えた旨を述べているが、決定稿とも少々異なる部分に我々はここで注目してみたい。

ノルボワは二人が結婚したのは時間が経過した後も結局、お互いが別れられなかったからだと言う。タイプ原稿への後の書き込みには「ご存知のように、娘が一人おりまして、明らかにそのことが関係したはずで」<sup>30</sup>と、おそらく当時九才ぐらいであったであろうジルベルトの存在が少なからず影響していることを説明する。実際、オデットは以下に示すように、この娘のためにスワンが結婚を考えるはずだと思っている。

自分たちの娘のためにスワンは結婚してくれるはずだとオデットは考えた。ちょうど社交界の男性たちが彼女の女友達と結婚したように<sup>31</sup>。

スワンのほうは結婚をめぐって以下の引用のように大いに揺れ動く。

しかしすぐに考えを変え、オデットがスワンにしばしば示した優しさや数々の魅力的な行為を思い起こし、彼女と結婚することは自分の義務だと思ってスワンは彼女のもとにもどるのだった<sup>32</sup>。

スワンは彼女の良さや独特の魅力を思い彼女と結婚すべきだと考えつつも、オデットの行状に疑惑を抱いて躊躇する。

今やスワンはオデットがおそらく司法記事でよく取り上げられる策謀家の一人のように思った。策に長けた彼女たちは金持ちの男とのあいだに生まれた子どもを使って相手をゆすり結婚させ、財産を手に入れた後は殺してしまう。スワンはこうしたことが犯罪者の一人でないかどうか誰が知っているかと思つた<sup>33</sup>。

このようにスワンはオデットが子供を使って彼の財産や結婚を狙っているのではないかとさえ疑う。しかしそれでも再びオデットの優しさを前にすると、ひどい疑いを抱いた自分を恥じ、また彼女とまだ結婚していない自分を恥じた。それでいて結婚した暁には、スワンはその結婚が一種のゆすりの結果ではなかったかとも自問する始末である。引用してみよう。

「……しかしその後結婚してからも、スワンはこの結婚がゆすりの結果ではなかったかと、また自分は犠牲者ではなかったかと、そしてオデットはいつか自分を毒殺するのではないかと自問した<sup>34</sup>。

タイプ原稿の中では、妻と娘をゲルマント公爵夫人に紹介できた場合のスワンの喜びや、スワンにとつてのゲルマント公爵夫妻の価値についての説明が、決定稿で言及されている以上にくわしく述べられている。とりわけ娘のジルベルトを紹介するイメージがスワンに結婚を決意させるきっかけになったことも記されている。以下にその箇所を引用してみよう。

ローム家「IIゲルマント家」はスワンにとつて社交界における特別な存在だった。スワンは彼らを愛し、彼らはスワンの頭の中で不滅の敬意を保っていた。スワンのほうも彼らに一目おかれていた。スワンは彼らに自分の幸福を示す考えを抱いていた。娘と大公妃とのこの初めての会見の想像が彼に結婚を決意させたのだろう。我々を決心させる前もつて描くあらゆる想像のように、この想像は実現されないか、もしくは、彼が思い描いていたのと全く違ったやり方で実現されるのを後に目にするだろう<sup>35</sup>。

さて、ここまで取り上げたタイプ原稿の記述は、大筋におい

ては決定稿に取り込まれる。例えば、タイプ原稿の中に見られたジルベルトの存在が結婚に影響を与えたことや、オデットのゆすりかと思われる策謀を前に結婚に対してスワンが複雑な思いを抱いた話などは、決定稿においては世間の噂話として語られる。そしてスワンが切望するゲルマント夫人への妻と娘の紹介の夢は、決定稿ではジルベルトを軸とする筋の展開に合わせ述べられる。ただ、プレイヤットの編者はタイプ原稿や、タイプ原稿を基にした加筆が、スワンとオデットの結婚を詳しく説明しているにもかかわらず、小説全体としては一貫した結婚の説明が欠けているふしも否定できないと指摘している<sup>36</sup>。

ところで結婚に至る種々の要因のなかでも、ゲルマント夫人に妻や娘を紹介したいというスワンの夢は決定稿の中でも比較的たつぷり語られる。先に見たタイプ原稿の中の「娘を大公妃に会わせる日のイメージが彼に結婚を決意させたのだろう<sup>37</sup>。」という一文を考慮に入れば、スワンが抱いた幸福のイメージがどのような性格のものであるのかをさらに問うことは重要だ。どのような社会や時代の枠組みの中で語られているものであるのか等にも注目してみたい。そうすることは、「スワンは結局、どういう理由でオデットとの結婚を決めたのだろうか」という小説の重要な関心事でありながらも、なかなか読み解くことのできない問いの解決の道に通じるように思える。

## 6 スワンが抱いた幸福のイメージとは

「家族の幸福のイメージ」というのは、スワンが生きた十九世紀後半、第二帝政期にあつては決して奇抜なものではなく、むしろ極めて一般的かつ常識的なイメージだったようだ。例えば、十九世紀後半を舞台にした他の小説にその例を求めることに困難はない。「感情教育」のフレデリックにしても、彼が真に望んだのはアルノー夫人との恋の成就のみならず、子供とともに三人で穏やかな家庭を築くことであり、実際、彼はそのような「父親になりたい」という夢を抱いたのだった。

そもそも近代市民社会における家族制度は、夫婦と子供からなる家庭生活を保証するとともにブルジョワ階級の一つの価値観を提示してもいた。この価値観は財産制度とも不可分に結び付き社会の経済の基盤を形成してもいた。そういう時代にあつて、フレデリックもスワンも、家庭像に関してほぼ似たような価値観を抱いていたのかも知れない。従つて、社交界でトップに君臨する敬愛すべきゲルマント夫人に妻と娘を紹介し認められたいというスワンの願いは、彼の幸福の達成のいわば「確認」の意味を持つのだろうか。

核家族を基盤とする市民生活の価値観は、おそらくルソーあたりから称えられるようになったという。それは主として生産と消費の経営体としての「家族」であつた<sup>38</sup>。フランス革命を経て築かれたナポレオン法典をもとにした家族制度では、妻に



対する夫の絶対的優位が確立された。そのことにより女性は、家庭に在る「弱き性」、すなわち妻としてそして母としての役割を献身的に果たすことが課せられたのである<sup>39</sup>。そして、そういう家事に携わる妻のいる「家族」こそ麗しき幸福の絵図として、十九世紀にはさらに一般的な市民階級の幸福のタイプとして広く流通するようになった。先のフーコーの言説に沿って述べるなら、このような「家族」の存在が親族関係の固定や財産の継承をスムーズにさせるのだから、市民の核家族に基づく価値の形成は、十九世紀の社会の安定と繁栄にとっては望ましいものであったのだ。

実際、安定した核家族はまず何より、現実の社会の要請であった。例えば、一八七〇年の普仏戦争の直後には、フランスがプロイセンとの戦争に負けたことの原因の一つに、出生率の低下が挙げられている。実際、十九世紀の約一世紀の間に、出生率は1パーセント余り減少している。この傾向は当時の人口統計学者達を困惑させた。

出生率という問題は言うまでもなく、社会における女性のありようと大いに関わりがある。それは社会に良き市民を供給するための家庭、そして子供の良き母親の存在という点においてである。ここから、近代の社会においては女性の身体が非常に重要な意味を帯び始めると同時に、十九世紀を通じて社会に必要な労働力を構成するための人口調整という目的の下、夫婦の生殖行為の社会的な管理が次第に進められることとなった<sup>40</sup>。

先に『失われた時を求めて』におけるスワンとオデットの結婚が一八八九年頃に設定されていることについて触れたけれども、ブルーストの描くスワンとオデットの出会いや、話者やジルベルトの誕生、そしてスワン家の家庭生活などは、十九世紀後半のまさに社会の近代的形態形成のさなかにおける「性的欲望」が「家族」をとおして社会の体制に組み込まれていく時代の流れを背景に展開していく。フーコーがセクシュアリティの装置、婚姻の装置と呼んだ二要素が、まさに「家族」という場において重複的に機能していく種々のシーンを見るようである。

さて、『失われた時を求めて』の決定稿において、先に挙げたスワンが妻と娘をゲルマント夫人に紹介することを切望していた場面の少し後には、スワンが娘ジルベルトを前にしながら自分の死後に思いをはせる箇所がある。

「……けれどもそうした男たち『スワン』も、自分の子供たちからは愛されていると感じるもので、その愛情は自分たちの名前そのものに体现されて、死後も自分たちを生かすにつづけるように思うのである。シャルル・スワンはいなくなろうとも、まだスワン嬢は残るだろう、あるいはスワン家の生まれのX夫人は残るだろう、そして今は亡き父親を愛しつづけるだろう。」<sup>41</sup>

これまで恋多き男であったスワンが長年、恋人達に捧げてきた



愛情の割りには、彼女達にさほど感謝もされなかつた過去を思い、それに比べると娘への愛情というものがいかに確実なものであるかを認識する場面である。

両親のいずれにもよく似た娘ジルベルトは、とりわけスワンにとつて何物にも代え難い存在である。娘に愛情を注ぐスワンに対してジルベルトは実によく応える。父親のことを「生まれたときからずっと愛しつづけている人」と呼び、「パパのお父様のご命日」には「いつもよりパパに意地悪くしないように心掛けて」いる。そして、父に「とつてもいい気持ちなのよ、パパのおそばに」と言つて甘える。そんなわけだから、スワンの方もジルベルトに対して愛情の全てを注ぐ。

スワンの抱く娘への愛情はむろん無償の父性愛なのだけれども、父性愛にしてはいささか大げさに過ぎるかも知れない。先に引用した中の「[...]自分の名のなかに具象化されて死後もこの世に自分を残すものとなるところの愛情を、自分たちのあいだにできた子供のなかに感じようとする「[...]」とは一体、何を言おうとしているのだろうか。

スワンは自分の死後も「スワンの娘」だとか「スワン家出身のだれそれ」といつた具合に将来、長きにわたつて自分の名が残ることを娘とおして望んでいる。娘や妻がゲルマント家に認められた暁にはスワンの名はおそらく、社交界においても長く存続する可能性がある。それではスワンが抱く「自分の死後もスワンの名を残したい」という望みとは実際、何を意味する

のであろうか。

先に、十九世紀の社会では夫婦の生殖行為の重要性が強調されるとともに、その管理が次第に進められることに触れたけれども、確かにこの世紀を通じて社会における「性」に対する感受性は鋭敏になつていったと言える。性に関する言語表現が増殖するとともに性の科学は成長した。そして性の問題は、「優良な種の保存」という観点から特に重視されるようになった。この時代の市民階級は何よりも自分の身体、長寿、そしてその産み出す子供に、また将来における子孫に無関心ではおれない。ブルジョワであるスワンもまた、自分の死後に残るものについて思いをはせることになる。彼が死後に自分の名を残したいと考えたのは他でもない、自分の子孫について考えたのであつたらう。そして、彼が愛情を注いだ娘ジルベルトは将来、永く続いていくであろう彼の子孫の担い手の一人であり、もっと言えばスワンの「永遠」への希求の可能性でもある。

先にも少しふれたが、フーコーは特にブルジョワにおける性に注目し、十八世紀中頃以降に支配権を握るこの階級が、性的欲望を出発点しながら健康や衛生、そして子孫と種族を伴う優秀な身体を構成しようとした点を強調する。該当箇所を少し引用してみよう。

「[...]ブルジョワジーは、自己の身体に対する神秘的で無  
際限な力を性に賦与することによつて、性と身体を同一視

するか、少なくとも性に身体を従属させた。性を己が未来の健康の責任者であるとするので、己が生と死とを性に結びつけた。己が子孫に対して性は避け難い作用をもつだろうと想定することで、性というものに己が未来を投資した<sup>42</sup>。

フランス革命以前のアンシャン・レژیーム期においても、もちろん貴族は貴族のやり方で自己の身体の特異性を主張してきた。すなわち、貴族階級の祖先の古さの価値を認識し、親族関係を視野に取めたくて名と財産の継承のシステムを確立し維持するために、純粋な血と種族を守ることである。そのため社会は婚姻のシステムを産み出し、この仕組みは祖先の価値の維持と親戚関係の保証をもたらす拘束のメカニズムとして長く機能してきたのであった。このように貴族の「血」という形において、彼らは社会における自らの立場を顕示し保持してきたのだ。こうして保たれた家柄と名誉の威厳こそが、ブルジョワジーをうらやましがらせる。

一方、フーコーによると、ブルジョワジーは自らの子孫と自らの生理的身体の健康という視点から、貴族の「血」に代わって自分達の「性」に目を向けたのだ。すなわち、ブルジョワジーは「貴族の血」を健康な「性的欲望」に転換させたのだ。そのようにして、今後の自分たちの繁栄を企てる。

「ところで、スワンが求めた「永遠」とは取りも直さず、スワ

ン家の永続的な繁栄の希求を意味する。例えば何代も続く高貴な家柄のゲルマント家<sup>43</sup>と違って、彼は裕福ではあるがユダヤ人の両替商の息子である。社交界に出入りする趣味人とはいえず、長きにわたって名家と崇められてきたゲルマント家とは<sup>44</sup>様相を異にするだろう。彼にとつて重要なのは誇るべき祖先ではなく、力と生の今後の拡張であり現在と未来の繁栄である。伝統を誇り過去にこだわる名家の貴族に対して、スワンはむしろ未来への投資に目を向けているはずである<sup>45</sup>。

過去の伝統よりも未来に繰り返し広げられるであろう子孫の繁栄に夢を託したスワンは、それではオデットとの結婚により、ジルベルトを通して夢を実現し得たのであろうか。残念ながら、その点ではスワンの結婚は報われたとは言えない。

スワンの積年の夢であった妻と娘をゲルマント公爵夫人に会わせることは、彼の生前、結局かなわなかった。しかし彼の死後、徐々に社交界に進出し始めるオデットの傍らで、娘ジルベルトはあろうことか、スワンの娘であることを巧みに隠しながら社交界に入り込む。オデットのフォルシュヴィル伯爵との結婚の際には、ジルベルトはあっさりとしてスワンの名を捨て去りフォルシュヴィル嬢を名乗る。このようにして、彼女はゲルマント一族の奥方におさまるのである<sup>46</sup>。ブルジョワとココットを両親に持つジルベルトが、かつてスワンの望んだゲルマントの一族に入り込み、しかも娘をもうけるという繁栄をものにしたが、それはスワンの名を捨て去ることで実現したというこの皮

肉。スワンの名を未来に残すことを望んでいたスワン、そしてそのための結婚は報われない結末を見るに至ったと言えるだろう。

おわりに

社交人スワンと元ココットであるオデットとの結婚は、どうも理解しにくいふしがある。ディレクタントであるスワンが抱く独特の結婚観ゆえとか、オデットからの強烈なアプローチのためとか、娘ジルベルトの存在ゆえだとか、激しい情熱がさめた後の静かな生活を望むなどと説明してみても、どうも十全な説明とは思えない。スワンは結局、どういう理由でオデットとの結婚を決めたのだろうか。我々はこのような疑問を抱きながら、まずは、没落する貴族に替わって台頭するブルジョワの社会状況にあつて、オデットのような高級娼婦はどのような結婚をものしたのか、またココットであるオデットと結婚したスワンの失墜がどのようなものだったかを確認した。そのうえで、当時の「性の言説」の語りをフーコーの理論の分析をとおして理解しようとした。

そして『失われた時を求めて』に立ち返り、スワンとオデットの結婚の話が創作されたプロセスを、ブルーストの自筆原稿の中でたどっていった。タイプ原稿上の「娘を大公妃に会わせる日のイメージが彼に結婚を決意させたのだろうか。」という一

文を考慮し、スワンが抱いた幸福のイメージがどういう性格のものであるのかをフーコーの分析を借りながら探ってみた。

ブルジョワであるスワンの抱く幸福は、自分の死後に残るものについての思いと重なる。実際、彼は自分の死後に思いをはせる。彼が死んだ後にも残りたいと考えたのは他でもない、自身の名である。彼は自分の子孫について考えた。彼にとつて、自分が愛情を注いだ娘ジルベルトは将来、永く続いていくであろう彼の子孫の担い手の一人である。もつと言えばスワンの「永遠」への希求の可能性でもある。スワンが求めた「永遠」とは取りも直さず、スワン家の永続的な繁栄の希求を意味するのだ。

ゲルマント家とは違い、スワンは裕福ではあるがユダヤ人の両替商の息子である。長きにわたって名家と崇められてきたゲルマント家とは様相を異にする。彼にとつて重要なのは誇るべき祖先ではなく、力と生の今後の拡張であり現在と未来の繁栄である。スワンは未来への投資、つまり過去の伝統よりも未来に繰り広げられるであろう子孫の繁栄に目を向けているはずである。

「スワンの恋」、もしくはその後の結婚に至る時代背景、そして時代の価値観を詳細に考慮に入れるなら、この結婚の意味はリアルに見えてくるのではないだろうか。すなわち、スワンは近代市民社会の家族制度の中にあつて、ブルジョワの家族観に基づき幸福な家族を夢見たのではないか。スワンとオデットの

結婚をこのように説明できないだろうか。

註

- 1 ロール・アドレル『パリと娼婦たち1830-1930』高頭麻子訳、河出書房新社、一九九二年、二〇頁。
- 2 ジャン・シャロン『高級娼婦リアース・ド・ブージー』小早川捷子訳、作品社、一九九九年参照。
- 3 Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 4 volumes, 1984-1989. 以下、*R.T.P.*。
- 4 ロール・アドレル 前掲書、五三頁。
- 5 ナタリー・エニック『物語の中の女たち』、内村瑠美子他訳、青山社、二〇〇三年、二三九頁。
- 6 アラン・コルバン『娼婦』、杉村和子監訳、藤原書店、一九九一年、一七八頁。
- 7 ミシユリース・ブーデ『よみがえる椿姫』、中山眞彦訳、白水社、一九九五年参照。
- 8 *R.T.P.*, t.I, p. 20.  
マルセル・ブルースト『失われた時を求めて1』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年、六二頁。
- 9 *R.T.P.*, t.III, p. 78.  
マルセル・ブルースト『失われた時を求めて7』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年、一七六頁。
- 10 *R.T.P.*, t.I, p. 147.

- 11 マルセル・ブルースト『失われた時を求めて1』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年、三一九頁。  
*Ibid.*, p. 561.  
マルセル・ブルースト『失われた時を求めて3』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年、三〇七頁。
- 12 *Ibid.*, p. 461.  
同右、九六頁。
- 13 A. Piperno, *Proust antifujif*, Liana Levi, 2006, p. 164.  
*R.T.P.*, t.IV, p. 165.
- 14 マルセル・ブルースト『失われた時を求めて11』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇七年、三四九頁。
- 15 A. Piperno, *op. cit.*, pp. 123-124.
- 16 M. Foucault, *Histoire de la sexualité I - La volonté de savoir*, tel Gallimard, 1976, p. 140.  
ミシェル・フーコー『知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、一九八六年、一三六頁。
- 17 *Ibid.*, pp. 147-148.  
同右、一四三頁。
- 18 *Ibid.*, pp. 166-167.  
同右、一六〇頁。
- 19 *R.T.P.*, t.I, pp. 457-471.
- 20 *Ibid.*, pp. 1047-1052.
- 21 N.a.fr. 16671. (N.a.fr. : Nouvelles acquisitions françaises (cotes de la Bibliothèque nationale)).
- 22 N.a.fr. 16662.
- 23 N.a.fr. 16671, F<sup>ms</sup> 9<sup>re</sup>-10<sup>re</sup>. Cf. *R.T.P.*, t.I, p. 1009.
- 24 N.a.fr. 16662, F<sup>ms</sup> 48<sup>re</sup>-49<sup>re</sup>. Cf. *R.T.P.*, t.I, p. 1010.

- 25 N.a.fr. 16662, ff<sup>vs</sup> 47<sup>v</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1010.  
 26 N.a.fr. 16660.  
 27 N.a.fr. 16660, ff<sup>vs</sup> 41<sup>r</sup>-44<sup>r</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1007.  
 28 W.Hachez, « La chronologie et l'âge des personnages dans *A la recherche du temps perdu* », *BAMP*, n°6, 1956.  
 29 R.T.P., t.I, pp. 1310-1315.  
 30 Cf. *ibid.*, p. 1343.  
 31 N.a.fr. 16735, 84<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1344.  
 32 N.a.fr. 16735, 86<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1345.  
 33 N.a.fr. 16735, 87<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1345.  
 34 N.a.fr. 16735, 88<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1345.  
 35 N.a.fr. 16735, 85<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1344.  
 36 R.T.P., t.I, p. 1348, note 1.  
 37 N.a.fr. 16735, 85<sup>re</sup>. Cf. R.T.P., t.I, p. 1344.  
 38 安川悦子『フェミニズムの社会思想史』、明石書店、二〇〇〇年、一七四—一八〇頁。  
 39 赤司道和『十九世紀パリ社会史』、北海道大学図書刊行会、二〇〇四年、九八頁。  
 40 中山元『フーコー入門』、ちくま新書、一九九六年、一五九—一六三頁。

- 41 R.T.P., t.I, pp. 556-557.  
 マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』、鈴木道彦訳、集英社文庫、二〇〇六年、二九七頁。  
 42 M. Foucault, *op. cit.*, p. 164.  
 『シネル・フーコー 前掲書』、一五七頁。  
 43 ヴィルパリジ侯爵夫人は、ゲルマント公爵および公爵夫人の伯母にあたるが、若い頃、波乱に満ちた生活を送り「不釣り合いな結婚」をしたために、貴族の論理からフオーブール・サン＝ジュルマンでの地位を低くすることになってしまった。  
 44 シヤルリュス男爵は、ジュピアンの姪を養女にし、ドロロン嬢の称号を与え、カンブルメールの息子と結婚させる。「血」もさることながら、彼は「家」の名や財産、親戚関係の維持にこだわったようだ。もちろん、カンブルメールの息子とは同じ趣味を共有している。  
 45 ブルジョワのヴェルデュラン夫人は子孫を残すことにはこだわらなかつたが、巧みな生き方で最終的にゲルマント大公と結婚し、フオーブール・サン＝ジュルマンに君臨した。  
 46 工藤庸子『ブルーストからコレットへ』、中公新書、一九九一年、三七—四二頁。